

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

《理工農系》

●九州大学人間環境学府都市共生デザイン専攻

「アジア都市問題を解くハビタット工学教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

急速に発展するアジア都市のグローバルな課題解決に向けて、鳥瞰力・実践力・国際力を修得させる人材育成を目的に、学際的素養や現地課題解決能力などを身に付けさせるオムニバス型集中講義や短期集中型ワークショップなどの実施を通じて、都市建築分野が包括的に取組む「ハビタット工学」のコース横断型プログラムを体系的に構築した。また、修学機会の時間的ゆとりを確保するために修士2年から博士1年までの期間を一体的に扱う新しい履修システムや、学生の自主的な学習課程で自らが考察したことをファイリングして体系化した「ポートフォリオ」による新しい評価方法を導入した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

人材育成の目的達成には、現場で課題を把握し、考察し、解決策を導き出し、実践させることを経験させることが一番の近道と考え、海外大学、国連機関、産業界との緊密な連携によるフィールド実践型の国際教育を本プログラムの中心に据えた。本プログラムの実施過程で発生した諸課題に対しFDや教員相互の議論を通じて解決策を講じるとともに、招聘した第一線の国内外講師には本プログラムの主旨を十分に伝え、受講学生には年2回のオリエンテーションを日本語と英語で行うなど、本プログラムの周知を徹底した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

プログラム修了認定者数は増加傾向にあり、アジア都市問題の重要性とともに本プログラムの取組みが学生間に着実に浸透している。学生自身がアジア都市問題の重要性とハビタット工学教育の意義を理解し、新たな視野が開かれた満足感と自己啓発・使命感を感じていることがアンケート調査から伺え、ハビタット工学教育の人材育成の第一歩が達成できたと考えている。また、博士後期課程の定員充足率は海外留学生が増加したことにより従前から大きく改善しており、本プログラムがアジアの国々の高いニーズに応えるものであることが確認された。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

《理工農系》

●九州大学人間環境学府都市共生デザイン専攻

「アジア都市問題を解くハビタット工学教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

現地での課題解決能力の育成のために、本学とアジア大学の大学院生が国際異分野混成チームを複数編成し、対象地区における都市建築の低炭素、長寿命、保存などをテーマとした現地調査、課題抽出・分析、代替案評価、デザイン提案、産業界・行政関係者等を交えた発表会までの過程を集中型ワークショップの形式で実施した。また、海外現地プロジェクトの就業体験を通して実務的な課題解決方法を修得する海外インターンシップを国連ハビタット、国連開発計画、海外設計事務所等と連携して実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

アジア大学と共同で実施する集中型ワークショップでは、教員と学生が現地に渡航する前に、安全で円滑なワークショップとするために、複数教員による現地調査を事前に行い、受入側のアジア大学の教員と入念な打合せを行っている。また、国連ハビタット等の現地事務所で行う海外インターンシップでは、学生に対して国連ハビタットによる一定期間の国内研修を行うなど準備期間を設け、海外設計事務所等に送り出した学生も含めて、海外滞在している学生とは定期的にメールで連絡し合い、現況の把握に努めた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本プログラム実施前では、海外留学や海外インターンシップを希望する学生は非常に少なかったが、本プログラムによって海外に目を向けて実践力・国際力を身に付けたいとする学生の自発的な意欲が昂進した。学生の意識改革の面で期待以上の成果が得られたと考えている。また、海外インターンシップを経験した学生が海外企業への就職を希望し、実際に数名の学生が海外企業や国連機関に就職し、更に海外インターンシップ先の海外企業から企業奨学金付きのインターンシップ受入の申し出があるなど、新たなキャリアパス形成の可能性も見えてきている。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

F. その他

③積極的な情報提供体制の確立

《理工農系》

●九州大学人間環境学府都市共生デザイン専攻

「アジア都市問題を解くハビタット工学教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

一般には、年度報告書の作成・配布を通して成果を広報することが多いが、本プログラムの年度報告書はデータ記録を中心とした学内配布に留め、取組み過程で得られた知見や学習成果を学生参加型の国際ジャーナル刊行(学術誌、情報誌)によって国内外に広く普及する情報発信方法を開発した。また、取組みの中で培った海外大学とのネットワークや産業界とのネットワークを活かし、国際連携コンソーシアム及び産学官連携コンソーシアムを構築した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

博士後期課程の大学院生をRAに雇用し、その雇用条件として、1)ピアレビュー国際学術誌(年2回)への投稿、2)国際情報誌(年2回)の企画、執筆、編集に参画、3)研究プロジェクト企画立案プロセスへの参画を設定し、新研究テーマ発掘能力や企画・マネジメント能力の修得の機会を設けた。RAを雇用するにあたっては、英語による書面審査と面接を行い、RAとしての能力の確認やRAの役割を十分に理解させた上で雇用した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

国際ジャーナル刊行による情報発信に加え、アジア都市研究の一線で活躍する研究者、実務者を招聘し、今後の教育研究や国際連携の方向性を討議する国際シンポジウムを開催しながら、ハビタット工学教育の創成と継続的発展のための学術情報を国際的に共有した。このことによって、ハビタット工学の国際的・学際的な教育研究を支援する国際学会ISHED(International Society of Habitat Engineering and Design)を、アジア主要大学の代表者や国連ハビタット福岡本部の協力のもと、平成23年10月に設立することができた。